

歴博 くらしの植物苑だより

第104回くらしの植物苑観察会 11月24日(土)

江戸の菊

菊が身近だった時代

平野 恵 (文京ふるさと歴史館)

菊は、現在でも根強いファンがおり、園芸植物のなかでも不動の地位を築いていますが、今から約200年前から100年前である江戸時代後期から明治時代にかけては、さらに現在よりもっと身近に菊の花が存在していました。

現代のように多種多様の娯楽がない時代ですから、「天気がいいから、ちょっと足をのぼして、ついでにおいしいものでも食べようか」と考えた行き先に、都心から5、6キロ離れたところで、毎年の秋の風物詩として行われていた菊人形展がありました。ほとんどが植木屋の庭内に飾られ、菊人形だけではなく、美しく仕立てられた菊花壇、池水豊かな庭を眺める座敷でくつろいでお茶を飲み、また美しく着飾ったご婦人たちを見るのも目の保養と考え、出不精な人でも秋の日の一日くらい出かけてもバチはあたらないという気になったことでしょう。

菊人形は、芸術的というよりはあまりに写実的で、まさしく前世紀の遺物といった観がまぬがれませんが、そこに演出された場面は、当時最大の娯楽である歌舞伎の名場面であり、しかも人形の顔は当時演じている俳優に似せて作ってあるのです。菊人形の観客には、菊好き、園芸好きというよりむしろ歌舞伎好きの側面が強く、歌舞伎の名場面を菊人形で再確認をするために、出かけた人々も多かったと思われます。



八百屋お七の菊人形

(協力：文京ふるさと歴史館・面六)

このような菊人形を考案し、演出したのは、主に植木屋の仕事でした。江戸から明治、大正にかけて、団子坂（現在の東京メトロ千代田線「千駄木」駅付近）には数多くの植木屋が立ち並び、大した観光地でもないこの土地に客を呼び込んだという点で、きわめて高度な観光マネジメントの能力を有していました。

今回の観察会では、菊人形をはじめ、菊花壇の障子の作り方や、種類の異なる菊を接ぎ木にして一本の幹に咲かせた「百種接分菊」など、植木屋がどのようにして菊の花を観客に「観せる努力」をしていたかを明らかにしていきたいと思います。また、今では古典園芸植物となってしまった「江戸菊」が生活のなかでデザインとして用いられ、菊といえば「江戸菊」であった時代の証拠をご披露します。

参考文献：

『菊人形今昔』（文京ふるさと歴史館）2002

平野恵著『十九世紀日本の園芸文化』（思文閣）2006



菓子掛け紙（文京ふるさと歴史館蔵）

次回予告 第105回くらしの植物苑観察会 2007年12月15日（土）

「サザンカの世界」 箱田 直紀（元恵泉女学園大学）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料